Ⅱ．厚生経済学の貧困・不平等への数理的アプローチーへ

（1）厚生（welfare）と社会的厚生関数

厚生経済学は、「厚生」という概念をもって、厚生の多寡でその社会状態の評価を行おうとする体系であり、様々な厚生関数を開発して社会や経済の状態を測定しようとする学問分野といえよう。この「厚生」とは、[welfare]の訳語の一つであり、[welfare]とは、幸福，健康，安寧，繁栄，福利，福祉(well-being)、社会の物質的または精神的繁栄などと訳されており、厚生経済学において「厚生」とは、財貨や社会状態などから得られる個人の心理的満足感と定義されいる。この定義の上で、人間の幸せを「厚生」の量として測定が可能であり、その多寡をもって、各地域間、時代間の社会状態の比較、そしてある政策の効果測定が可能であるとしている。その枠組みにおける貧困とは「厚生の少ない状態」である。

「厚生」とは、ピグーが 1920 年に出版した有名な著書『厚生経済学』において初めて使用された概念だが、このピグーの「厚生経済学」はそれから 10 年余りでライオネル・ロビンズの批判「ひとびとがある経済メカニズムの帰結から受ける主観的満足(効用或いは厚生[1])であれば、万人に共通な尺度はありえず、加法的集計も論理的に無理である」との批判に直撃されて瓦解している。そしてこのライオネル・ロビンズの批判に触発されたヴィルフレッド・パレートが 1930 年代の後半、序数的効用理論をもって「新厚生経済学」を誕生させたという。

（2）新厚生経済学のパレート原理

ライオネル・ロビンズの指摘のように「厚生」の個人間比較や加法的に集計する事は不可能であっても、個人はある事象の効用水準の比較、序数付けはできると言う構成において、新厚生経済学は旧厚生経済学の隘路を超えたとされている。そしてヴィルフレッド・パレートは、他者の満足度（効用）を下げてはならないという条件の下で、誰も自己の満足度（効用）を上げることができないように資源が配分されている社会状態であれば、その状態をパレート最適な資源配分とみなす事ができると構成している。

こうして新厚生経済学における序数的効用理論が提示され、効用、厚生についての個人間比較は不可能であり、各個人の効用を加法的に集計する事はできないけれども、社会の資源配分状態から受ける効用については、個人はその順序付けを行う事が出来ると構成して、人々が全員一致して支持、是認する場合には、その資源配分状態は、社会的厚生が極大状況が達成されている状態であるとし、この状態をパレート最適とする事ができるとしている。

---

[1] 鈴村興太郎　後藤玲子『アマルティア・セン　経済学と倫理学』P12　実教出版 2005 年 11 月 25 日

パレート最適な状態とは、完全競争的な市場価格メカニズムが、理想的な条件下で実現できる資源配分の社会状態であり、新厚生経済学の中核的な概念として、新厚生経済学の基本定理と見做されている。しかしパレート最適を定義するためには、満足度（効用）が専ら資源の量と種類によって決定され、かつ資源が排他的に所有されていることが前提である。

そこで新厚生経済学的な貧困、不平等へのアプローチにおいては、「パレート最適」という評価基準をもつ体系として、厚生はその社会の人々の心理的満足であり、その少なさとして貧困を考察しようとし、所得情報に規定される「厚生」の不足の度合いを、貧困度や不平等度を表すさまざまな方程式、変換式を想定し関数関係（社会的厚生関数）を構成している。

この流れは19世紀以降の社会現象をも科学的実証的に把握分析しようとする流れに沿っており、数理と言う最も抽象化された枠組みにおいて、社会状態の評価、社会政策の効果を検討しようとする、政策の立案過程にコミットすべく体系としての構成と言えよう。

（3）貧困測度（指標）

①セン測度の開発まで

1960年代から1970年代にかけて、先進国では「社会指標運動」とも呼ばれる、社会指標の研究と開発が行われた[2]。その時期は、「絶対的貧困の問題は現代ではもはや消滅した。それに変わって登場したのが相対的貧困・剥奪の問題である」と言う声が高まった時期[3]、1970年代と符号している。

『貧困と飢饉』（1981年）までのアマルティア・センの貧困研究は、「所得や消費支出によって個人の厚生を計測するという伝統的経済学の枠組みで、貧困の概念化・指標化を厳密に行うところに力点があった[4]」とされており、「セン測度」という貧困測度（poverty measure）を1973年－76年にかけて完成させている[5]。

それまでの貧困を測定する方法としては、多用されている 2 つの測度があり、一つは貧困者比率（その社会で貧困線以下の所得で生活する人の占める比率）であり、もう一つ所得ギャップ比率（貧者の所得が貧困ラインからどれ程平均すると下回っているか）である。これらの測度では何%の人が貧困なのか、そして貧困者達の所得は平均して貧困ラインからど

---

[2] 野上裕生　絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』　P202　晃洋書房　2005年2月25日

[3] 鈴村興太郎　後藤玲子『アマルティア・セン　経済学と倫理学』P207　実教出版 2005年11月25日

[4] 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』　P83 84　晃洋書房　2005年2月25日

[5] 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』　P86　晃洋書房　2005年2月25日

れ程低いのか、この二つの観点から、その社会の貧困の度合いを考察していた。

しかしセンは、この二つの測度では把握出来ない貧困者内部の異質性に注目し、「貧困者内部でも様々な状況の人々がおり、それゆえに社会・経済的変化による影響も一様ではない[6]」事に関心を抱いた。貧しい人々の間にも所得の格差があるので貧困ラインからずっと下の所得水準で、貧困ギャップの大きい、深刻な貧困者の状態と人数が反映される[7]ことを求めて、それを可能にするように工夫された公理（必要条件）『順位付けされた相対的剥奪』を考案して、相対的剥奪の程度を順位付けする測度「セン測度」を開発した訳である。

②　セン測度という貧困指標（poverty measure）

それまで多用されていた貧困者を均一な集団として扱う二つの測度（貧困率、貧困ギャップ比率）に対して、貧困者内部の格差を反映する新しい「貧困測度」こそが、1976 年に公刊された論文「貧困：測定への序数的アプローチ」[Sen(1976b)]に於いて発表された、貧困率、貧困ギャップ比率、そして貧困者のジニ係数を抱える新しい測度「セン測度」である。子の測度は「公理的に導出されたという理論的アプローチに加えて、貧困層内部の不平等をジニ係数という形で取り込んだものと解釈できる為、直感的にも理解しやすくすぐれたものであった[8]」とされている。

ｉ）セン測度の導出過程

アマルティア・センは、公理的方法と言われる手法により、貧困指標に求められるべき条件と公理として立てて、それまでの貧困指標の分析を進めた。

必要な条件①「焦点性公理」とは、他の条件を一定にした場合、貧困線以下の人々（貧困者）の所得に変化が無ければ、貧困線以上の人々（非貧困者）の所得変化は、貧困指標に影響を与えない。②「単調性公理」とは、他の条件を一定にした場合、貧困線以下の人々（貧困者）の所得が減少した場合、貧困指標は増加する。③「移転公理」とは、貧困者内部で、相対的に所得が少ない者から多い者に所得が移転されるが、所得移転を受けたものも貧困ライン以下に留まる貧困指標は増加する、である。

この 3 つの公理による分析、公理分析によれば、それまで多用されていた貧困率という測度は、焦点性以外は満たさず、また貧困ギャップ比率は、焦点性公理と単調性公理は満たすのだが、移転公理は満たさない事が分析的に示されている。さらに貧困率×貧困ギャップ比

---

6 絵所秀紀　山崎幸治編著　アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―　Ｐ84　　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

7 同上　P86(「順位付けされた相対的剥奪」の公理

8　絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』　Ｐ86　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

率についても、移転公理は満たさない事が分析、解析された。

そこで移転公理をも満たす指標の開発へと向かったわけだが、その時に付した公理が「順位付けされた相対的剥奪」の公理である。この公理は貧困線以下の所得として十把一絡げ、同一集団としての貧困者全体を、貧困線所得に近い比較的所得の多い層と極貧層を区別して、すべての貧困層において、所得の多い人から少ない方に向かって順番に並べ、所得の少ない程度によって順位をつけ、いわば所得の少ない層にはウェイト付けをして集計する方法を採用している。結果として貧困線以下の所得の人々の間で所得が少ない程不平等が大きいとして、センの考案した貧困測度において集計される。

この式で、ウェイト付けされた所得の計測は、結果としてジニ係数に重なっているものであった。こうしてセン測度と言う貧困指標は、公理をもって導入された貧困測度であり、かつ最も多用されてきた不平等指数のジニ係数と重なる式を導出している点で、不平等計測を含んだ貧困指標として分かり易いものであった。このような貧困測定について、説得性のある測度として、セン測度が多用され受け入れられた経過である。

ⅱ）セン測度の式の構成と意味合い

セン測度には有名な不平等測度「ジニ係数」が内包されており、そのジニ係数の均等分割線は、貧困者と非貧困者を分ける貧困線所得、貧困者の最高所得額と一致しているという、貧困者内部の異質性、格差に注目するこの測度の展開式は下記の通りである。

センの貧困測度　：（セン測度のジニ関数の均等分割線は貧困ラインである）

$$P\text{（貧困の度合い）} = H(I+(1-I)\times\text{貧困者内部のジニ関数})$$

展開すると：　P（貧困の度合い）＝HI　＋　H(1-I)×貧困者内部のジニ関数

H　（貧困率）：　（貧困線以下の人数／全人口数）

I　（所得ギャップ比率）：（貧困線－貧困者所得の平均／貧困線）

上記セン測度の前項は、貧困率と所得ギャップ比率を掛けた値であり、貧困者全体の富（累計所得額）の不足量であり、いわば貧困者の人数とその低所得の度合い、貧困の深さの値である。そして後項は貧困者の所得不平等を示すジニ係数に貧困者の富（累計所得額）に比例する値を係数としてかけているので、貧困者内部の不平等について、貧困者全体が貧しければ貧しいほど小さくなる値である。

そこでこの測度全体は、絶対的貧困を反映する前項と、相対的貧困を反映する後項とを加法的に合計した値と考えられ、先進国型、後進国型の相体的貧困、絶対的貧困の様相、その関係をよくなぞっている。（このホームページ上で図解として検討しているので参照下さい）

セン測度は、各社会の貧困状態を数量化し、基数的に序列化して比較できるので、集団間で貧困度の比較ができる事、また同一集団内の貧困状態の改善や悪化の度合い、貧困政策の

効果測定ができると言う利点を有しており、1970 年代から 80 年代前半にかけての貧困計測において集中的に用いられ、貧困概念の数理的分析、精密化に大きく貢献している。この成果は多くの貧困指数の開発を促し、近年とりわけ幅広く活用されている一群の貧困指標、FGT 指標[9]群の開発へと向かったと言う。

センス測度は「貧困と不平等と言う相互に関連してはいるが異なった二つの関心を統合する最初の試み[10]」 とされ、貧困は不平等を内包している事を数理的に明らかにしたものであり、「貧困者内部の不平等をジニ係数と言う形で取り込んだものと解釈できる[11]」直感的にも理解できる優れた測度として、その後の貧困測定に公理分析の手法の展開を引き出している。
参）当ホームページ　図解-センの貧困測度（指標）センの貧困測度（指標）の図解
newsenindex.pdf (mirai21canalnew.com)
Anti-welfareeconomics.pdf (mirai21canalnew.com)

（４）　センス測度以降の動き―（不平等概念と含意と公理分析）

センス測度の開発の後、センス測度に触発され、貧困者内部の所得分布に感応的（不平等の動向に反応する）貧困測度の研究はその後、量的に膨大で質的に緻密な文献を誕生させた[12]と言われる。貧困概念の数理的分析、精密化に大きく貢献したセン測度は、多くの貧困指数の開発を促し、それらは「S 測度の依拠するジニ係数の使用を他の不平等測度によって置き換える事ができると言う事実[13]」によるセン測度の拡張であり、セン測度内のジニ係数を二乗形、3 乗形へと変化させるなど不平等測度を他形に置き変えるなどした上で、改良した計測の結果を、それぞれの傾向性を各公理によって分析していると言う。

この「公理分析」とされる手法による不平等指数、貧困指数の開発において、それまでの貧困概念が抱えていた含意としての規範的判断を、「公理」として取り出し、その焦点を明示化するので、貧困についての議論の水準は精密化され、その規範的判断をめぐる理解が進んだとの評価である。セン測度は「貧困と不平等と言う相互に関連してはいるが異なった二

---

9 同上 P86
10　鈴村興太郎　後藤玲子　『アマルティア・セン―経済学と倫理学』P223　実教出版　2005 年 11 月 25 日
11 絵所秀紀　山崎幸治編著　アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―　P 86　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日
12 鈴村興太郎　後藤玲子『アマルティア・セン　経済学と倫理学』P223　実教出版 2005 年 11 月 25 日
13 アマルティア・セン　鈴森興太郎・須賀晃一訳『不平等の経済学』P194 東洋経済新報社　2008 年 9 月 9 日

つの関心を統合する最初の試み」[14]とされ、相対的貧困（剥奪）と絶対的貧困の関係、貧困は不平等を抱え持つ概念である事を数理的に明らかにしたものであった。

Ⅲ．厚生経済学的な不平等へのアプローチとは何かー測度と公理分析

センス測度の開発が拓いた地平は、貧困は不平等問題を包含する概念である事が数理的に証明された結果としての、貧困概念が変えている含意と言うべき貧困概念の幅について、公理分析の手法を通して、多面的に検討されるに至った事であろう。

（1）　不平等にある個人の不平等感覚に影響を与える事象の解明のために

①　均等分割線

そこで所得不平等計測、その測度では、まず社会の代表値、標準値をどの所得額（ライン）に設定すべきか、誰と比較しての不平等なのか？と言った「比較する他者」をどのラインに設定するのか問われてくる。このラインが不平等測度の均等分割線であり、不平等測定の根幹を決するラインともいえよう。しかしながらこのラインは、不平等測定の目的、その社会の特性によらざるを得ず、画一的に措定不可能な、恣意的なライン（所得額）として、この比較する他者、「社会の代表値」をどのラインに設定するのか、この点が不平等測定の議論の出発点と言うべき問題とならざるを得ない。

そしてこのラインこそが、個人において、自身の不平等の問題は、その不平等が誰との比較において問題とされているのか、比較する他者を厚生経済学的な効用水準において、どのレベルの不平等として、いかなる不平等として切り取られるのか、その内容を決する水準といえよう。

②　分布感応性

前述「厚生」とは財貨や社会状態などから得られる心理的満足感と定義されているのだが、貧困不平等に対峙するひとびとの心理社会的問題、貧困不平等の心理的な影響、剥奪感（心理社会的問題）をどのようにして捉え得るのか、さらにその社会的要因、背景について、その影響について、不平等計測との相関関係はどう動くのか、その観点をいれつつ、不平等を測るという手法が求められ、この解明のための様々な公理分析の手法が開発され駆使されていった。

そして社会の貧困層内部の階層構造、極貧層から貧困線に近い層までの人口分布の様態をとらえ、社会の所得分布の変化に影響をうける剥奪感の影響について、分布感応性という概念をもって、人々の心理的満足感と「不平等感覚、剥奪感」との相関関係についについて、考慮する貧困不平等の測度が考案されていった。貧困にさらされる人々の剥奪感は、その社

14　同上　P223

会の階層分布の中で、極貧な少数の人々、あるいは大勢の平均的な貧しさの中の人々などと、社会内のどの位置にある（階層順位）人々において、どのような人口構成において、人間はどのように剥奪感に晒されるのかについて、どのような重みづけをもって剥奪を捕捉して不平等測定に反映させるのかという事を考慮する手法である。不平等に晒される人々の剥奪感情を勘案できるように工夫された測度、それらは分布感応的な測度と呼ばれる。（セン測度がその最初の測度であった）

所得の絶対的な低さに加えて、社会内の所得順位の動向という要因、「社会内での貧困順位」、すなわち自分より貧しい人の人数といった、社会の階層構造に規定される不平等感覚、その度合いに感応して、貧困不平等度を測定する事を求める測度の構成は、不平等は社会心理的な問題でもある事の数理的な表現といえよう。

（2）　さまざまな不平等計測

前述のように、ブースのロンドン踏査以来の貧困研究は、貧困とは貧困線以下の低所得状態としてその概念枠が限定され、貧困率、貧困ギャップ比率から、その社会の貧困の度合いを把握する時代へ、そして戦後の相対的貧困の議論へと向かった。さらにはセン測度以降のジニ係数を抱えた貧困測度の開発は、所得不平等について、各不平等測度の捕捉する不平等の中身、不平等測度の傾向性の検討へと向かわざるを得ない展開であった。

古くは「マックス・O. ローレンツが 1905 年にアメリカで発表した曲線は、ウィルフォード・I. キングによって 1912 年ローレンツ曲線と命名[15]」されており、1914 年のイタリアでは「のちに『ジニ係数』と呼ばれ、所得分布の不平等度を統計的に計測するに重視されるようになった『集中比』が始めて公表[16]された」と言う。

そしてローレンツ曲線は「不平等測度に関する研究において中心的な役割を担ってきた重要な概念」であり、ジニ係数はローレンツ曲線と絶対均等線との間の面積により不平等を測定する測度として、後に厚生経済学的に評価されて今日に至っている。

また情報理論で検討される、ある事象の起こりにくさと、その事象が実際に起こったと言う情報価値との関係は、起こる確率が低いほど情報価値は高まるという関係なので、この関係を対数変換させてから、平等な所得状態の社会がエントロピー（状態量・変化しにくさ）最大（平等な社会）として、所得をある事象の起こりにくさとを対応させて、情報理論を不平等測度に転用するのがコルム指数である。この指数は政策対応において期待される不平等概念の構造を、良くなぞっているという。

---

[15]木村和範『ジニ係数の形成』P153　北海道大学出版会　2008 年 3 月 10 日
[16] 同上 P213

（３）　不平等指数ジニ係数について

①　ローレンツ曲線とジニ係数

ローレンツ曲線は「社会内階層間の所得順位」により個々人の所得額準位に従って並べて図形化し、この形式で社会内の全構成員の所得の偏在を図形的に示している。そのため個人間の貧困の順位が捕捉されており、さらにローレンツ曲線と均等分配線の差異を集計するのがジニ係数であり、「不平等測度に関する研究において中心的な役割を担ってきた重要な概念」とされ多用されている指標である。

ジニ係数における均等分割線は（所得均等分布線)、社会内の全ての人が同じ所得である場合の仮定的な累積所得を示している。その社会の全所得対全人口を 1 対Ｉとして係数値正方形に図形化して指標とする形式と採っているのがジニ係数であり、所得のバラツキ度合いが、均等分配線とローレンツ曲線の差の面積を 2 倍した数値として係数化され、完全な均等分配社会（すべての構成員は同一収入の社会）がジニ係数ゼロ社会であり、一人が社会の全所得を占有する社会ではジニ係数は１となる構成である。ジニ係数は、「不平等測度に関する研究において中心的な役割を担ってきた重要な概念」とされている。

②　公理分析、重みづけ

不平等問題を抱えているのが貧困であり、その不平等度の計測をどのような観点に重きを置いて測るべきか、人口規模、平均所得、バラツキの影響などの観点について分析されるべく、貧困測度は公理（統計の集計作業上の縛り、条件)を付したうえで、その変動の様態から、その社会の階層構造や生活財の配分上の偏りにおいて、どのような変化が想定されるのか、それぞれの傾向性の分析検討をとおして、貧困調査のそれぞれの目的に応じた分析がなされることへと向かった。その社会の不平等の傾向性を把握しようとするわけである。

不平等とは比較する相手により変化する関係的概念であり、所得のばらつき度は、多様な要因の影響を受けて変化しつつあり、社会の階層構造の変化に伴いつつ動き、時々の経済動向に左右され、社会的に構築されつつある問題である。社会構成員個々の不平等感覚の根拠についても、それらを抱えつつの歴史的によって社会的に構築され社会関係と共にあると問題とも言えよう。そこで厚生経済学的な不平等アプローチとしてのジニ係数は、所得不平等問題として限定されつつも、社会的に構築の途上にあって変化しつつある社会の階層構造がもたらす人々の社会心理的な問題を含む貧困問題について、公理分析の手法によるアプローチによって、貧困不平等の調査を進める側の目的、価値観にもより、分析の視点は異る所から、不平等測度が示すデータからの、さまざまに引き出しうる解析されうるデータとして、公理分析の手法の活用手法が産みだされ、活用されるという展開であった。

（４）．不平等問題の曖昧性、相対性、さまざまな含意について

「アーサー・セシル・ピグー（1877-1959）の記念碑的な著作[Pigue(1920)]」である『厚経済学』」によって開始し、「誕生からわずか 10 年余りでライオネル・ロビンズの批判に直撃されて瓦解した」とされる旧厚生経済学。そして「1930 年代を席巻した序数主義的経済学の情報的基礎と接合した、ジョン・ヒックスらの補償原理学派やケネス・アローらの社会厚生関数学派[17]」は、やがてパレート原理の適用可能性を前提にバーグソン―サムエルソンの社会的厚生関数までたどり着いた。そしてそれからが、アローの一般不可能性定理、アマルティア・センのリベラル・パラドックス（impossibility of a Paretian Liberal）を迎えた、厚生経済学である。

「厚生」をもってして、人間の社会の「善」、あるいは「人間の幸せ」を測る事、そしてそれをもって各社会状態を比較して、優劣をつける事はできるのだろうか？個人間で比較可能な「人間の幸せの量」とは、どのように構成され、どの様な形式を採るのだろうか？

① 国家政策の対象たる貧困との関係

21 世紀の今日、「新しい貧困」が提唱され、貧困は人間社会が克服すべき社会問題として政策的な取り組みが行われ、各国社会保障制度、社会政策上の目的を脱貧困としている。そして一方の不平等問題は、否定さるべき問題ではなく、その克服のために人を活動的にさせるとの評価もあるように、社会の中に必要な問題であるとする論者も少なくはない。

さらに不平等問題は、例えば国家政策的に克服すべき問題として登場すべく要請される貧困概念との関係において、国家政策、公的扶助制度（生活保護制度）の基準、国家的な「貧困線をどこに設定するのか」という議論の中では、相対性、曖昧性故に、一定の留保が求められざるを得ないと言う、「懐疑主義につながる要素[18]」も指摘された訳である。

19 世紀に興隆した科学観に従えば、科学的な営為は「一つの真実」を求めるものであり、近代的理性の指し示すべき「真実・真理」は、曖昧性や相対性は、払拭さるべきであった。この中で不平等問題は、国家予算を充てて対応さるべき貧困との関係においては、絶対的な基準をもって概念付けられるべき貧困概念に対して、誰との比較において、何を比較するのかによって、議論の枠組みも評価も異なると言う曖昧性、相対性を抱える構成であった。

生活財の不足をベースに置く「剥奪」という概念は、絶対的に必要な水準を求め得る貧困と構成されつつも、「相対的貧困」は「絶対的貧困」と対比されて、曖昧性相対性を抱える問題設定として、普遍的真実を突いているとは言い難いという不平等問題同様の特徴が指摘され、「懐疑主義的」な受け止め方がなされたとの指摘も見られる訳である。

---

17 https://ja.wikipedia.org/wiki/　厚生経済学　2016/05/01
18 藤村正之『貧困・不平等と社会福祉』P23　有斐閣　1997 年 4 月 20 日

② 貧困概念における必要な観念装置としての絶対と相対

時は 19 世紀、貧困概念にも科学性が要求されて、「絶対的貧困」か「相対的貧困」かという二項対立的な論点の設定の中で、「二者択一的争い」の中での論争が引き続き、不平等問題の抱える相対性は科学的真実に背離するなどの印象を免れなかったと思われる。

（※相対的貧困線については、現在の国際標準の相対的貧困線は、OECD 基準であり「**等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人数の平方根で割って算出）が全人口の中央値の半分未満」**としており、その社会の平均所得の動向で左右される。）

ところでレヴィ＝ストロースは、自身が創り出したターム、「熱い社会」「冷たい社会」について、この言葉は必要な理論的観念装置であり、限界事例を考えているのであって、 絶対的に熱い、あるいは絶対的に冷たい社会はどこにも存在しない、熱冷どちらかの両端に位置する社会はひとつもない[19]と説明している。

貧困概念における「絶対的」「相対的」という二つの対立的な概念設定もまた、「必要な理論的観念装置」という意味合いで捉える事ができるであろう。近代の夜明けの時、19 世紀的科学主義・近代的理性への期待、科学的世界には絶対的的真理があって、それを明らかにするのが科学的営みであり、それを行う事ができる近代的理性といった、期待と希望が渦巻く時代状況であったと思われる。

近代の夜明け、その延長上には、相対的であることは真実ではなく、社会科学的、自然科学的真実はひとつ、それを顕かにせんとする近代人の理性、そして科学の営みといった近代主義的世界観の内側で、厚生経済学も動いていたと思われる。

（5）「準順序」の考え方・貧困・不平等の順位付けについて

① 公理的方法（axiomatic method）

人間の心理的満足感である「厚生」を数量化し、その多寡から社会や人間の貧困状態、不平等状態を把握、計測しようとする厚生経済学において、社会の状態を評価するツールとしての社会的厚生関数が多数開発されている。その研究において、各時代や地域を超えて、すべての社会を比べる事ができる完備的な貧困測度が求められた。

ここでアマルティァ・センは、貧困、不平等のような複雑な社会状態の評価においては、価値自由な事実判断を求めても、評価する側の一定の価値基準、視点から全く自由な評価はありえず、影響を受けざるを得ない事を認めた上で、それぞれの社会的厚生関数に、その内包する価値判断を明示する「公理」を課し、あるいは「公理」によって分析する事によって、

---

[19] レヴィ＝ストロース／エリボン 『遠近の回想』P225 みすず書房 1991 年 12 月

多様な貧困測度、不平等測度の弾きだす貧困度、不平等度を比較検討してすり合わせる手法、「準順序」を提案するわけである。

そこで用いられる「公理」とは、「貧困指標に求められる条件を公理として立て、従来の貧困指標をその観点から再検討して特徴と問題点を抽出、その上で、それらの公理を満たすような新しい貧困指標を導出した[20]」という記述が示すように、「公理」とはある貧困指標、あるいは不平等指標が暗黙の裡の想定している貧困概念、あるいは不平等概念を分析し、その特徴を確認できるような、各測度、社会的厚生関数に課せられる「条件（しばり)」として、考える事ができるであろう。様々な「公理」を満たす事ができるか否かによって、いろいろな貧困測度、不平等指数は、その特徴を把握され、分類されることができる。

② 不平等（貧困者内部の所得分布）に感応的な貧困測度

たとえば不平等指標の「公理（条件)」については、

①「対称性」(構成員同志を入れ替えても、不平等指標が変化しない事)、

②「複製・規模に関する不変性」(ある分布を複製してもとの分布に加えても、不平等指標が変化しない・各所得水準に属する人口が同一比率で変化しても、不平等の測定値は不変に留まる[21])、

③「平均からの独立性」(ある正の数によって計測の単位を変更しても不平等指数が変化しないこと)、

④「移転感応性（逆進的な所得移転によって不平等指標は増加する）等を満たすものとされてきた[22]という。

しかしマルティア・センは「移転感応性」については疑問を呈している。

貧困者の所得分布に反応する、所得不平等に影響を受ける貧困測度、つまり貧困と不平等の関連性を前提にする貧困測度の分析において、大きな役割をもつ公理のうち③の中の三つ（移転感応性・**ピグー・ドルートマン条件（PD 条件)）・「貧困者階層内部の所得水準に対する感応性条件[23]」**を考察したい。

③ 貧困と不平等の関連性・貧困測度と公理分析

---

[20] 絵所秀紀　山崎幸治編著　アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―　P84-85 晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

[21] 鈴村興太郎　後藤玲子　アマルティア・セン　経済学と倫理学　P84、95　実教出版　2005 年 11 月 25 日

[22] 絵所秀紀　山崎幸治編著　アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―　P96 晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

[23] 鈴村興太郎　後藤玲子　アマルティア・セン　経済学と倫理学　P82　実教出版　2005 年 11 月 25 日

ⅰ）移転感応性、移転公理

不平等概念に必要とされ、妥当とされる性質として、「貧困者内部のより所得の低い個人から、高い個人に所得の移転があった場合には、不平等度は増大すべき」とする要請を受け入れているか否かを示す公理が「移転公理[24]」である。

この公理による分析は、「所得分配の動学[25]」に依存するとの表現のように、「長期にわたる不平等の変化に関係する」事象を明らかにすること、つまり時間軸ある考察ができる。

たとえば、その社会の実際の所得データによって算出される不平等度をとり、そしてある時間経過後に想定されるような所得移転があった場合、変化した基礎データによって算出される不平等度が、どのように変化したのかを把握して、その変化の様相からその不平等測度の特徴を確認し、他の形式の測度との違いや共通性を検討すると言う手順が用いられる。

※移転公理を満たさない場合

だがこの場合、移転後の所得が貧困線を越えて脱貧困する人々が発生する場合があり得るので、その場合は貧困者の範囲や所得階層の構成と言う基礎的なデータの変更を引き起す。この場合は移転後の貧困度は、この公理の要請を果たすことができず、公理を満たさない場合もあり得る。所得移転によって均等分割線を超えて、脱貧困する人々がおり、貧困者データ総数自体が変化する場合である。

ⅱ）ピグー・ドルートマン条件（PD 条件）

移転に関する公理の中の、有名なピグー・ドルートマン条件（PD 条件）とは、所得分布のあらゆる位置における高所得階層と低所得階層との格差を同列に扱っており、人口と総所得が一定である場合に、「低所得者から高所得者への(順位を逆転させない)所得移転は、他の条件に変わりがない限り、不平等の測定値を増化させる[26]」事を、その不平等測度に求める「公理（条件)」である。

ⅲ）不平等測度を分類する際の分水嶺としての二つの公理

（1-「貧困者階層内部の所得水準に対する感応性条件[27]」と 2-ピグー・ドルートマン条件（PD 条件））について）

「貧困者階層内部の所得水準に対する感応性条件」とは、ⅱ）で示したピグー・ドルートマン条件（PD 条件）に対して、「同一規模の所得移転であっても、低所得水準に有る

24　注）移転公理 同上　P82

25 松本保美『社会的選択と厚生経済学ハンドブック』12 章不平等の測定　P703　丸善株式会社　平成 18 年 6 月 30 日

26 鈴村興太郎　後藤玲子　アマルティア・セン　経済学と倫理学　P82　実教出版　2005 年 11 月 25 日

27 鈴村興太郎　後藤玲子　アマルティア・セン　経済学と倫理学　P82　実教出版　2005 年 11 月 25 日

個人間の所得移転は、高所得水準にある個人間の所得移転と比較して不平等の測定値の変化に対する効果が大きい」と言う事を求める条件である。

そこでこの公理は、より貧しい人々の困窮度に重きを置いて不平等を捉えなければならないとする「規範的な内容」を測度に要求していると考えられる。この内容は高所得階層と低所得階層では、同じ金額の所得移転があっても、生活への影響は同じではなく、低所得であればある程同じ金額でも影響は大きいとする立場に立っていると考えられる。

ピグー・ドルートマン条件（PD 条件）と他方の「所得水準に対する感応性条件」の違いは、低所得階層と高所得階層の所得移転の効果の違いを受け入れるか否かとして、同時的に双方を満たす不平等測度は存在不可能である。そこでこの**2 つの公理は多くの不平等測度を分類する際の分水嶺であると説明されている。**

ⅳ）「分解可能性[28]」について

「グループ全体の不平等指標が、サブ・グループの不平等指標の加重平均で表され、そのウェイトがそのサブ・グループの全人口に占める人口比に比例するような性質」を求める公理である。不平等との関連を有する貧困指標では満たさないことが多い。

例えば、その集団を人数が異なる様々な単位の集団に分割しても、どのような単位の集団でも母集団の貧困度、不平等度を反映する事、また母集団の所得分布の変化と下位集団の所得分布の変化とはプラスの相関関係があると言う条件を求める訳である。この条件を満たすためには、社会内の階層分化が少ない均質な社会、あるいは階層構造があっても、その構造が全体的に均質、安定的である事が想定される。

そのような社会では、年齢、男女、居住地、職業などの多様な軸で分割した集団においても、その所得分布が母集団の所得分布を反映するのだから、格差が階層間で大きく、下位集団の中に、押しなべて低所得層で構成されているような身分的特徴を持つ集団が存在する場合、所得のばらつきが社会の様々な小集団で入り組んでいる社会には当てはまらないであろう。そこで格差に感応的な貧困測度においては、この公理を満たさない事が多いのは大いに頷けるのではないだろうか。

この公理は政策策定のための調査では、集団の傾向の把握上で効率性ある、望ましい特徴なために、社会調査指標や測度がこの条件を満たしている事は望ましいのだが、セン測度はこの公理を満たすことができない。この点がセン測度に変わって、FGT 指標群が開発された理由ともなっている。

---

[28] 注）分解可能性　同 P96

④　準順序（共通部分アプローチ）について

このような「公理分析」による様々な不平等指標や貧困測度の検討の後に、センは時代や地域性を超えて社会の不平等度、貧困度を比較する事ができる、完備的な測度は特定できない事を示し、その上でそれぞれの不平等指数の示す値、複数の不平等測度のはじき出す不平等度の値を調整する課程を明示し、その調整を経た柔らかい不平等順位を求める考え方「**準順位（共通部分アプローチ）**」を示してゆくわけである。こういった不平等測度の値を「すり合わせた上での順位」が、柔らかい順序関係、順順序である。

別の表現においては、複数の測度の示す値を調整する場合、課せられる公理（条件）を明示した上で、「各測度の適用範囲を適切に限定する事によって、両者を部分的に両立させる可能性がひらかれる。[29]」と、説明される手法が共通部分アプローチ（準順序）である。

伝統的な経済学では、貧困測定や政策判断においては、価値中立的な事実判断を求めて、異論やズレ、重なりを捨象し、厳密な順序付けを求めてきた訳である。それに対して、判断に際しての多様な価値の存在を認め、さまざまな評価形式の間で、評価のすり合わせの可能性をさぐり、評価の質を考察するというこの手法、発想自体が、厚生による価値判断に対する、意味深いアンチテーゼであろう。

不平等の構造は社会文化的事情に規定されており、社会の動態的な構造（経済動向、政治的、社会的動向）の影響下で動いており、時代や地域性により異なり、さらに今なお新たな要素が構築されていると考えられる。

不平等とは、いわば社会的構築の途上にある概念として、不平等評価には曖昧性や相対性を抱えざるを得ず、そしてその不平等を抱えている貧困概念もまた、緩やかな順序を持ってしか評価に及べない、完備的に測る事ができない概念構成である事を「準順序」という方法論が物語っていると思われる。

Ⅳ．アマルティア・センの貧困研究（セン測度迄）

（1）セン測度をめぐって

上記 1976 年に公刊された論文「貧困：測定への序数的アプローチ［Sen(1976b)］」に於いて、センは上記、新しい貧困測度「セン測度」を発表する。この貧困測度が「公理的に導出されたという理論的アピールに加えて、貧困層内部の不平等をジニ係数という形で取り込んだものと解釈できる為、直感的にも理解しやすく優れたものであった。[30]」とされ、「貧

---

[29] 鈴村興太郎　後藤玲子　アマルティア・セン　経済学と倫理学　P81　　実教出版　2005 年 11 月 25 日

[30] 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―　』

困と不平等と言う相互に関連してはいるが異なった二つの関心を統合する最初の試み[31]」として評価された新しい貧困測度である。これ以降、所得分配の不平等に反応する貧困測度の研究は膨大に進んだ[32]と言う。

① センン測度という関数の組み立て方

不平等問題と貧困との違いは、貧困はあくまでも低所得者層の問題であるのに対して、不平等問題は社会構造全体の問題であり、かつその社会の標準値とされる他者との比較において生起する、関係的概念である事である。この貧困と不平等の概念構成上の違いを抱えつつ、センの貧困測度は、貧困度を示す関数関係の中に不平等測度を抱え込んでいる。この間の違いとして、一つは不平等問題は社会の全体の問題であるのに対して、貧困問題は一部低所得層の問題と言う違いがり、二つには不平等問題は関係的概念であり比較する他者を均等分割線として明示している事であろう。この違いの調整の為に、不平等指数（ジニ係数）を抱き込んでいるセン測度は以下の特徴を抱えざるを得ないと考えられる。

ⅰ）打ち切り

センン測度は、相対的貧困（不平等問題）と絶対的貧困の関係を数理的に示しているのだが、この測度では、貧困度を算出するための所得情報が、貧困線以上の非貧困者（富裕者）の所得について、貧困線ラインに留めて（貧困線所得で打ち切り）、非貧困者（富裕者）の貧困線以上の所得は無視して貧困度を算出している所に特徴がある。この手法は所得の「打ち切り」と呼ばれている。

この手法は、貧困とは社会の中の低所得層の問題である事、不平等問題は社会の全体構造の問題であると言う相違点についての、数理的調整と考える事ができるであろう。

ⅱ）セン測度が抱えるジニ係数

二つ目の特徴は、上記の結果といえるのだが、セン測度のジニ係数を抱える項（不平等を反映する部分）だが、この不平等を評価する数値、データは、貧困者のみの所得によっている。かつ当該ジニ係数の均等分割線、比較する他者とは、貧困線所得者である。

つまり貧困と不平等とは異なる概念であり、データの扱いは社会全体の問題としての不平等と一部貧困階層の問題としての貧困との間の調整形態として、セン測度は富裕者（非貧困者）所得をすべて貧困線で打ち切っており、結果として、不平等問題も貧困者階層の問題と限定せざるを得ず、その結果として不平等の計測（ジニ係数）は、社会の全構成員ではなく貧困者のみの所得の不平等としている。この所得不平等を示す、所得の偏りの算出は、貧

P86　19 行 晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

[31] 鈴村興太郎 後藤玲子 『アマルティア・センー経済学と倫理学』P223 実教出版 2005 年 11 月 25 日

[32] アマルティア・セン著　鈴村興太郎・須賀晃一訳『不平等の経済学』P185

困線所得との差（貧困ギャップ）の集計値をもって捉える、その均等分割線は貧困線という構成である。

ⅲ）貧困線水準とセン測度

セン測度は、上記貧困線を均等分割線とするジニ係数を抱えており、また「貧困率」が前項、後項関数の全体をカバーしており（前項、後項双方をカバーして掛けられている)、結果としてこの指標は、全人口が貧困線所得を達成する状態、社会の脱貧困のための所得累計（社会全体が脱貧困できる富）を軸にする指標、測度となっている。

セン測度は、貧困線の動向によって、基礎的なデータ(貧困者数、社会の脱貧困の為の所得累計額)が変動するという特徴を抱えており、恣意性、相対性を完全に払拭できない値である貧困線を、どう設定するのか、その水準に大きく影響を受ける貧困測度となっている。この点が貧困線付近で「連続性の公理」を満たさず「強移転公理」を満たさない理由である。

この三点がセン測度の関数の構成上の特徴と考えられる。さらに 3 点目の貧困水準の影響について考察しよう。

② 貧困線水準が及ぼすセン測度への影響

セン測度は、貧困率が関数の全体（前項、後項の双方）に掛けられており、この事の影響が「貧困線に対して非常に重要な意味を付して、貧困率（頭数比率）に本質的な役割を指定している[33]」と指摘され、貧困線をどう設定するのかが測度の全体を規定している。

ⅰ）移転公理に関連して

セン測度の、貧困者内部での階層変化をあとづける機能を抱えている「移転公理」による分析では、設定された貧困線水準によっては、セン測度はある層が移転後に貧困線を超える場合も有り得る。そのためにセン測度において、移転公理による検討には貧困者数（貧困率）という最も基礎的な情報が変化する。

このためにセン測度においては、「強移転性の公理」が「たとえ移転によって貧困線を超える人々が発生しても、貧困度が増加する事」を求めるところから、この「強移転の公理」を満たすことができず、また貧困線付近では関数の「連続性」が保障されないと言う特徴を有することになる。

ⅱ）不平等概念の均等分割線・貧困概念の貧困線

---

[33] アマルティア・セン著　鈴村興太郎・須賀晃一訳『不平等の経済学』P196
東洋経済新報社　2008 年 9 月

そしてこの事は、貧困概念は、不平等の過酷な部分を孕みこんでいながら、同時に貧困線所得者と言う他者との比較において浮かび上がる概念、切り取られた概念でもあると言う事であり、貧困概念もまた、貧困線所得と言う他者との比較において概念枠を決定する概念であったと言う事が示されているといえよう。

不平等概念が均等分割線という、比較する他者との関係で浮かび上がる概念であるのと同様に、貧困概念もまた「関係の世界においては個は存在しない[34] 。」と言う表現に当てはまる、貧困線水準の人々との間で規定される関係的な概念と言わざるを得ないのであり、貧困と不平等を一つの数式に取り込むにあたり、その比較する他者は双方において共通的に貧困線所得を採用せざるを得ないのである。

ⅲ）貧困と不平等の重なり合い

センⅡ測度が抱えている不平等指数（ジニ係数）は貧困者内部の不平等を示すものであり、かつその不平等における比較する他者とは貧困線所得の人々である。この事が象徴的に示しているのは、この二つの概念における比較する他者とは、貧困線と言う一点に収斂せざるを得ないのであって、貧困概念も不平等概念も、他者との比較において概念を画する関係的概念であって、その比較する他者とは双方ともに貧困線として構成されざるを得ないという事であろう。

新しい貧困、過酷な生活問題、絶対的貧困、相対的貧困、社会的排除などと表現される貧困問題は、貧困と不平等問題の重なり合いの中にある貧困状態示しており、不平等問題を抱えている貧困概念の輪郭は、低所得問題でありながら、生活様式、住宅条件、そして社会関係的な齟齬、社会的権能の劣勢などの様々な不平等を抱えた、結果としての低所得などの生活困難を呈している。

そこで貧困概念は不平等問題を抱えた概念でありながら、貧困線の設定によっては可塑性、変容を呈する概念構成であり、貧困線所得者という他者との関係において、概念を形づくる概念でありながらも、その貧困線の設定についても、完全には恣意性を免れる事は出来ない概念である。このところに不平等に影響を受ける貧困測度の議論は、膨大にならざるを得なかった事情があり、貧困と不平等は互いに独立した別概念であると言うよりは、重なり合いを有して影響しあう概念としてあり、「分配感応的な貧困測度」とされる測度の意味あい、その貧困の辞退把握への説得性の深さの所以であろうと考えられる。

不平等問題は生活の全分野に及ぶ問題であり、不平等のうちの過酷な部分、貧困を深める事象、生活困窮として重要な側面における不平等は、歴史性、時代性をもって特徴的な形を

---

[34] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P79　岩波セミナーブックス２　岩波書店 2009 年 3 月

もって貧困概念の内側にあり、貧困概念との重なり具合を変化させながら全体を形づくっていると考えられる。

Ⅴ．不平等問題とは何か？

（1）不平等問題の範囲

人間社会における不平等問題の対象領域は、文化人類学的、レヴィ＝ストロース的に言えば、象徴機能に係る全領域、それが生み出した有形、無形の事象に関係するのであろうから、無形的な文化事象（自由、人権、参加、交流等）のすべてが含まれ得るであろうし、人間が形成する社会関係において、互酬性、分かち合いが満たされず、生活財の交換権限の崩壊、物質的剥奪、心理的衰弱、無力感が生じている事態、それらを引き起こす諸場面、諸領域に係ると想定され得る。

いわばモースが言う所の「全体的社会的事実」を覆いつくし、人間の生命活動たる生活の展開、その目的であり、結果であり、現実であるところの、時代の流れとともに、全方位に向かって拡大し、あるいは縮小しているところの「不平等問題」というべきであろうか。

そこで、所得の不平等、物質的剥奪を含み、その人の生きる社会内での劣勢、不自由、「ジェンダー概念」による男女の非対称性が認められ分析され得るすべての社会関係、それに向き合う個人の心理的衰弱（無力感）、心理的実在をも根拠にして、文化人類学的に表現するところの社会文化的事象、有形的、無形的事象のすべてにおける、非対称性、劣勢を包含しうるのであろう。

従って人間の観念作用、象徴機能の産み出した全て、社会参加、役割分担、権利義務、自由などの対等な分かち合い、人間の存在様式からの要求、社会の文化全体、有形無形の文化事象をも分かち合うべく要求への窮乏、その中での負の偏りの大なるところを取り込むと考えられる。

（2）不平等問題への文化人類学的な視点

レヴィ＝ストロースの神話論理の展開をみれば、人間の象徴機能は、類推（アナロジー）のさまざまな様態、隠喩（近い意味において連想）、換喩（遠い意味同士の類似性がある類推）、反転（真逆の意味へと展開する連想）、そして両義的な意味を持つ自然の動植物を媒介にする項などを重ねて多方位への類推（アナロジー）が展開するのだが、そのようないわば 360 方位の広がりであるところの観念作用の広がり、人間の文化の広がりにおいて展開する、社会文化的範疇とされるところの広がりのままに、人間における互酬性への期待、望みが生じており、しかしながらそのずれ込み、不平等は、それらの領域を覆いつつ、対象領域は広がりつつあると考える事ができよう。

不平等は、人間の象徴機能が産み出した全て、社会文化的な事象における、互酬性、対等性の齟齬、ずれ込みとして、その場面に向き合う人間における互酬性、対等性への要求が満たされておらず、社会関係上の齟齬、ずれ込みを生きる状況とその中を生きる人間の心理的剥奪が概念化されているとして考えられ、従ってこの対象領域は、ユニヴァーサルに及ばざるを得ないと言う見解もあり得るのであろう。

そこで人間の生活にとって、どの領域、どの項目、どの生存条件がより重要なのか、この選択に係っていわば論者の規範的観点が異なり得る問題として、「剥奪」から「排除」へと、その観点は移動しているのが、不平等問題であると考えられよう。

（3）過酷な不平等問題としての貧困問題

低所得としての貧困概念においても、社会関係的な齟齬、劣勢などの不平等問題は、低所得状態という貧困の原因でもあり結果でもありつつ、貧困のベースに横たわっていると思われる。そして人間は社会集団内で生活財（食料等）を調達するのであり、財市場、非市場的な交換関係などの多重層的な社会経済システムの中での交換関係に対峙している。このような場面での劣勢、排除等、不平等の影響は、不平等が極まるにつれてさまざまな生活状態の窮乏を引き起こし、それらの相互作用の結果として生活困窮、貧困を齎すと言えよう。

こうして、時代性、地域性をもって拡大、あるいは縮小しつつある不平等問題は、その社会の特徴ある文化や習俗に規定されつつ、生活遂行上の劣勢を引き起こし、その過酷な部分が生活困窮として表れ、心理的憂鬱、無力感などとともに、不平等であって貧困であると言う生活状態に陥るものと考えられる。古典的な貧困概念としての絶対的貧困概念は、所得不平等問題として、括られている。

近代の夜明け、産業革命以降の社会の中で、地縁的、血縁的な共同体を離れて、都市への流入を余儀なくされた都市生活者への戸別訪問として組織化されたソーシャルワーク活動は、貧困者への相談として開始して展開をしている。その当時から、ソーシャルワーク活動においては、貧困は過酷な生活問題として、常に多軸的（住宅問題、栄養不足、傷病等）なアプローチを採っており、不平等問題としての「過酷な困窮」が立ち現れている所から、友愛訪問やセッツルメント活動として、貧困不平等への対応がなされてきたと理解される。

（4）　貧困、不平等への厚生主義的アプローチの限界について

このような、生活の全分野に及ぶ貧困、不平等問題を、「厚生」を物や財から得られる人間の心理的満足感と定義した上で、「厚生」を媒介にして貧困不平等を測定する手法、厚生経済学的手法に対するアマルティア・センの批判、その観点は、厚生情報の指し示す範囲の

限定性に対して、貧困、不平等問題の対象領域、「全体的社会的事実[35]」というべき無限定的な全体性からの、当然の限界性指摘、批判と考える事ができよう。

さらに不平等問題は、相手のある問題であり、他者との比較、他者との関係性において生じ始めて気付かれる問題であり、社会を営む人間存在における他者関係とは、「関係の世界においては個は存在しない[36]。」と表現される相対的な問題であり続けると思われる。

①厚生主義について

その社会の望ましさや、社会的厚生（効用、満足度）を考えるのが厚生経済学である。旧厚生経済学は、「最大多数の最大幸福」を求めて、社会的厚生の最大化をもたらす財の配分を最適な分配とする。社会全体としての厚生（社会的厚生）は社会を構成する個々人の効用を加法的に集計して測る事ができると考えた。

この思想に従えば、もし個人１に生来の障碍が有って、個人２と所得が同じでも個人２と比べると効用は常に２分の１であるとする。この場合、社会的厚生は、個人１よりも、個人２により多い所得を配分する方が、個人２の所得は個人１より多い効用を生むので、全体の効用の総量は多くなる。つまり障碍ある人には少ない配分とする事が望ましいとならざるをえない。このような配分原理が社会福祉の価値に反する事は言うまでも無い。

しかし個人の効用とは「ひとびとがある経済メカニズムの帰結から受ける主観的満足(効用或いは厚生[37])」であれば、万人に共通な尺度はありえない。個人と個人の間で効用を比較する事、加法的集計も論理的に不可能であるとの批判がなされた。この当然の批判を容れて、効用の個人間比較ができないと言う前提に立つ序数的効用をもって、新厚生経済学が開始するわけである。

この「序数的効用」「厚生」を人間の幸せを測り比べるための単位、基準値とする事、その不足を貧困と構成して貧困の程度を測り比べる事の限界性、厚生によっては測定不能の幸福を構成する領域、部分が、むしろ膨大に広がる事が、厚生主義批判として展開されていると考える事ができよう。

② センの貧困不平等研究と社会福祉の生活問題

---

35 レヴィ＝ストロース　馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造（上)』P132　番町書房　昭和 52 年 11 月 20 日

36 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P79　岩波セミナーブックス２　岩波書店 2009 年 3 月

37 鈴村興太郎　後藤玲子　アマルティア・セン　経済学と倫理学　P12　実教出版 2005 年 11 月 25 日

社会福祉の側で問題にする「生活ニーズの不充足」の状態と、厚生経済学における「厚生（心理的な満足感）の不足」の不足との関係について、貧困研究、貧困指数の開発における厚生の定義から考察したい。

センの厚生主義批判の骨子は、「厚生」情報が、人間生活を構成する多様な要因について捕捉困難なほどの、狭隘性、限定性を抱えていると言う指摘であろう。そして貧困概念、絶対的貧困概念は、貧困線所得との関係で浮かび上がる概念であるところから、相対的な概念として、飢饉の蔓延する社会状態では機能できないと言う問題であろう。

そして、貧困不平等にかかわって、例えば「剥奪感」といった心理社会的な視点の導入は、貧困概念は自然生物的要求の窮乏を視野にいれつつ、文化社会的な影響について焦点化していると考えられるのだが、厚生経済学における貧困指標（測度）が含意する範囲は、厚生は所得の増減と正の相関関係が想定されているので、社会文化的な生活ニーズについて、零れ落ちる所を抱えている厚生情報からのアプローチについて、指摘をしていると言えよう。貧困不平等問題は生活の全分野にわたる生活問題として生活の全分野を眺め渡す理解をもって、たとえば心理社会的問題を含みつつの、貧困不平等測定に複眼的な視点を求めるのではないだろうか？

独立した個人を想定し、その中で財の量にのみに反応すると言う人間理解を前提している厚生概念の中の人間像は、多様な条件下で生きる個人の生活問題としての貧困不平等問題へのアプローチにおいては、所得を活用する個人の境遇（身体、精神的障碍、出自など）の違いを、厚生情報では捕捉しきれないという指摘がセンの指摘であった。

③　厚生判断が取りこぼす問題―個人の境遇、生きる社会的条件・貧困原因の重層性

人間は個々人が同じ所得であっても、その所得から得られる満足度(厚生)はその境遇、社会的な条件によっては違いが生じ、同じ所得があっても障害をもってする生活では厚生は低くならざるを得ない。厚生（効用）を軸にする判断においては個人の境遇、生きる諸条件の違いからのマイナスの影響等は、想定できない構成である。個々独立して経済行動を進める個人が想定されている。こした独立的な閉じられた概念設定としての傾向道の主体なので、環境要因の変化を織り込むことや、人間生活自体が社会関係の中にあって相互に影響し合いながら営まれていると言う、社会システムの中の個人として、社会文化的な要因を捨象した主体としての人間像が前提である。

そこでその人の出自、出身世帯の貧困は、学歴や社会的立場の劣勢を引き起こし、障碍や病弱を抱えての生活は、同じ所得、財の配分があっても、その人の厚生（効用）、満足感は常に少なくならざるを得ない。この少ない厚生しか生じる事ができない人達への財の

配分問題において、社会的厚生の増大を軸にする厚生主義においては、この障碍、病弱などを抱える人々への配分を少なく、境遇の優っている人々には多く配分する事が、社会的厚生最大化に叶う配分であった。

そのために人生のスタートを、人生を大きく左右する個人の境遇への補償を、厚生を軸にする厚生経済学的枠組みにおいては否定されざるを得ないのであった。この点が社会福祉の価値に反する事は言うまでもないが、センはこのような厚生を軸にする判断に対して、「衡平性の弱公理(weak equity axiom)[38]」という弱い平等主義的な要請、平等性に関する道徳判断の枠組みを公理として課している。この要請は、「常に厚生（満足度）の低い人にはより多くを配分せよ」という要請である。しかしこの公理は「厚生主義的な社会的厚生関数はこの公理を侵犯する可能性をもつ[39]」事が示され、厚生主義的なアプローチの限界を露呈しているとされる。

④まとめ：不平等問題と厚生情報―厚生情報では捉えきれない不平等問題

個人の所得から直接導かれる厚生、効用をもっては、他者との社会関係上で問題になる不平等、格差をトータルには捕捉できない事として、不平等問題は関係概念であるところから、そして人間の文化の多様性もあり、焦点化される不平等問題を構成情報では捉えきれない、そもそもひとつの平等と他の側面の平等との衝突を生み出すとも指摘される。

厚生経済学的な不平等問題は、その社会内の他者の所得との比較、所得格差の問題としてアプローチされるのだが、近代以降の市場経済の席巻を考えれば、財市場での交換関係が生活財調達の主要な場面として拡大し続けているので、所得による貧困へのアプローチは、今尚、生活の多面的な側面での生活物資の窮乏、その直接的、間接的な影響を捕捉するための、有効な手法であり続けていると言えよう。

しかしながら一方では、社会という箍（たが）の内側に生きる人間存在とっては、所得だけでは捉える事ができない問題、社会心理学的領域が横たわっている。社会という箍（たが)、クリフォード・ギアツの文化定義によれば、人間の行動を支配する制御装置、それが文化だという。

たとえばその時代、その社会に生きる人々の「人間の幸せ」にとって大切な事柄とは何か、何の平等が大切なのか、富か自由か人間自体かなどと、不平等問題は人間生活、人間

---

[38] 同上　P88
2005 年 11 月 25 日
衡平性の弱公理「所得のどの水準に対しても、個人 i の効用は個人 j の効用を下回るものとせよ。その時、所与の総所得を i と j を含む n 人の間で分配する際には、最適な所得分配は個人 j に対するよりも個人 i に対してより多くの所得を与えなければない」

[39] 同上　P88

の幸せの評価の根幹に係る問題、価値規範性にも影響をうける。そして「人間の幸せ」は人間の心理過程という見えざる事実によっても左右される問題である。

人間の幸せの平等配分を求めようとすれば、不平等に向き合って生きる人々の物質的剥奪、さらにはその心理的衰弱（憂鬱)、社会の慣習、習俗上の重要課題（人権、職業選択の自由、男女差別、身分制、生活様式等)、病への対処、職業能力の獲得などの社会保障の影響などと、文化次元と言うべきさまざまを含む重要な問題が横たわっている。

そこでその社会の経済システムや文化傾向、生活財の交換の様態、政治的安定性へと議論の範囲が動かざるを得ないのが不平等の議論であり、時代の進展とともにその射程の範囲を拡大、縮小せざるを得ないといった、いわば無限定性を抱えていると言えよう。

この点が不平等の把握のための情報的基礎の多次元性、重層性として表れており、不平等問題をどの観点、何との比較において捉えるのかという、評価する側の視点、社会の文化、産業構造をも斟酌せざるを得ないと言う問題となり、不平等問題とはその概念構成上、厚生では覆いきれない問題、対象領域を抱えて広がり展開していると考えざるを得ないのであろう。新しい貧困と言われる貧困が提示され、そして受け入れられる下地はここにあると思われる。

④多軸情報で貧困、不平等を測る指標

ｉ）　相対的貧困

所得情報と言う単一の情報で様々な厚生関数を構成して、貧困・不平等の程度を測ろうとする厚生主義的な測度に対して、たとえば相対的貧困（不平等問題でもある）においては生活様式と表現される多軸的な生活情報、その食生活、住生活、家族構成等の生活全体に及ぶ複合的な項目を捉えて進める、貧困・不平等の計測が行われている。

この相対的貧困（剥奪）と言う不平等を計測する指標は、この概念の提唱者である T．タウンゼント自身が最初に開発した測度があって、阿部彩の説明では「12 の生活活動を行うために必要と考えられる 60 の項目をリスト アップし、それらの所有（項目が活動の場合は、その活動をしているか否か）を調査対象 者に問い、yes の場合は 1、no の場合は 0 とした二値変数のリストを得、それらを単純に 加算したもの」と紹介しており、60 項目によるアプローチである。

ii）センのエンタイトルメント・ケイパビリティ　によるアプローチ

貧困と不平等の関係を数理的に示した貧困測度がセン測度と言われる貧困指標だが、この開発者である厚生経済学者、ベンガル人のアマルティア・センは、その後「厚生」をなぞる「所得」情報によって社会の状態（貧困・不平等党）を測定する経済学的な貧困不平等へのアプロローチから、多軸情報による貧困不平等の測定へと、軸足を変えている。

まず始まりとしては、自身が子供の頃に目撃したベンガル飢饉を始めとする各地各時代の飢饉の原因分析等のために、食糧を合法的に手に入れる社会的な権限（エンタイトルメント）の崩壊過程から、飢饉の進行、拡大を捉えようとしている。この試みは多くの議論を呼んで。飢饉の原因が、必ずしもその地方の食糧の総供給量ではなく、天災（洪水・旱魃）の影響が、職業集団毎、社会の階層構造によって、被害は異なる事を示している。

この試みを通じて、センは構成に変わる、新しい貧困・不平等を計測する事が出来る概念として、ケイパビリティ概念（潜在能力）を提示して、その構成要素を諸機能（ファンクショニングズ）として多軸の構成要素をもって貧困へのアプローチを提案している。

ⅲ）　国連の人間開発指標

国連の 1990 年の動きとして、「国連開発計画（UNDP）駐日代表事務所ホームページ」では、「人間開発指数（HDI）は、「保健、教育、所得」という人間開発の 3 つの側面に関して、ある国における平均達成度を測るための簡便な指標である。1990 年に刊行された人間開発報告書創刊版のために、パキスタン人の経済学者である故マブーブル・ハックがノーベル経済学賞受賞者であるアマルティア・センやそのほかの優れた人間開発の専門家の協力を得て考案した。所得水準や経済成長率など、国の開発の度合いを測るためにそれまで用いられていた指標にとって代わるものとして、この指数は導入された」としている。

ⅳ）EU の社会調査

EU（ヨーロッパ・ユニオン)等では各種社会調査の結果を総動員して、年収、他の生活状態等の相互関係を拾い、有意ある相関関係を把握しての、生活実態調査から不平等計測を行っていて、21 世紀の初頭には多様な生活場面（生活物資の調達の市場、家族、地域、職業生活等）での、諸社会関係上の齟齬を「社会的排除」とする不平等問題を新しい貧困「社会的排除」としている。新しい貧困とされた「社会的排除」の指標では、その調査項目は生活の多軸性をなぞっており、生活全分野、7 次元、50 項目[40]に及んでいる。

その後欧州 2020 戦略以降の現在の EU では、金融危機以後の欧州社会の貧困化を受けて、「社会的排除」とする新しい貧困への調査は、物質的剥奪、低所得問題と諸生活問題との相関を把握する傾向であり、各種社会調査の綜合的相関把握を通しての実態調査となっており、今般は物質的剥奪重視への回帰も読み取れるところである。

参）当ホームページ　　eu2020sp4.pdf (mirai21canalnew.com)

（2）　飢饉へのエンタイトルメント・アプローチ

ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センは 1981 年、自身が 10 歳の時に目撃体験

[40] 安倍彩　「日本における社会的排除の実態とその要因」P32

をしたベンガル飢饉を含む飢饉の分析を、『貧困と飢餓　(Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation,)』において展開しており、厚生に変わる「エンタイトルメント（権限アプローチ）」による貧困と飢饉へのアプローチを試みている。

ⅰ）エンタイトルメントとは

このアプローチは、当時の飢饉は「その地域への食糧の供給の不足－FDA（Food Availability Decline）を主要な原因としている」とする「常識的な見解」への批判と受け取られ、様々な逆批判に晒されている。そしてこの後センは貧困への分析視点をエンタイトルメント（権限）からケイパビリティ（潜在能力）へと、そのアプローチを移してゆく。センが 1983 年、「開発：今何処に」と言う発展途上国の経済開発に関する論文の中で、「ケイパビリティ（潜在能力)」と、「エンタイトルメント（権限)」の関係について、「エンタイトルメントは『ケイパビリティの導関数にとどまる』[41]」とし「ケイパビリティ」が「エンタイトルメント」より広い概念である事を示し、またエンタイトルメント・アプローチは「ケイパビリティ・アプローチへの第一歩[42]」としてセンは指摘している。

エンタイトルメント(entitlement, 権原）とは、「ある社会において正当な方法で『ある財の集まりを手に入れ、もしくは自由に用いる事の出来る能力・資格』[43]」さらには「私的所有制度を前提に，社会において当人に開かれたいろいろな合法的ルートを経て取得し得る，交換可能な財の組み合わせ[44]」と定義されている。財取得の合法的ルートには資本市場における購入の他に、交換・生産・移転（自家生産、労働の現物対価、贈与等の市場外の物資取得、物々交換等）を含むと理解されている。

このアプローチの特徴として、(1) 市場経済と言う制度的枠組みの中で飢饉を考察した事（２）食糧の総供給という総需要と言う集計化された数値からは、飢饉の社会的影響を論じる事は出来ないと言う点を明らかにした[45]との 2 点が指摘されている。不平等への厚生主義的なアプローチは、公理を課して、不平等とされた社会内部の階層関係の動向とその影響の精査を通して、厚生と言う単一の情報による貧困調査の限界を示していったと言えよう。

ⅱ）エンタイトルメントを用いた 4 つの飢饉の比較分析

---

41 絵所秀紀　「後期アマルティア・センの開発思想」P13
repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/1433/1/69-2esho.pdf　2016/08/01

42 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』P 89 晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

43 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』P 88　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

44 http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/db1980/8100sa.htm　2016/08/01

45 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』P 120　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

センン自身が 7 歳の時に目撃したベンガル飢饉(1943 年)、エチオピア飢饉(1972-1974 年)農民層と牧畜民、サヘル地域の旱魃（1968－73 年）と飢饉、バングラデシュ飢饉（1974 年）についてセンは、エンタチトルメント（権限概念）を軸にして、その原因と実態について比較分析をし、その成果を『貧困と飢饉』として著している。

その調査には、共通的な指標を用いてはいないが、「食料の総供給量」「最多数の飢餓犠牲者が出た職業」「その集団は賦存量（飢饉以前の手持ち食糧）の喪失・市場等での食料獲得権限の喪失の程度と経過と影響度」が比較分析され、食料や財の交換のための社会的権能の（エンタイトルメント）の崩壊過程は、絶対的貧困の極まった社会状態、食料の供給不足である飢饉においても、地域の食糧総供給量、経済の好不況以外の事象、職業集団毎、社会内の直量調達に係わる形式、慣習などの階層間の社会構造、その中で現れる不平等の構造が、人々の食料の調達権限の喪失過程に影響を及ぼしており、その影響を最も大きく被る人々と影響の少ない人々、双方が社会を構成している事を示している。

ⅲ）エンタイトルメント・アプローチの影響について

絶対的貧困，飢饉と相対的貧困（不平等）について

飢饉の分析は、その地域で発生した飢饉の影響さえもが、社会的文脈の内側にあり、生活財・主に食料）を手にする社会的権能の喪失とその影響を特に大きく被る社会階層があって、人間における絶対的貧困の現実もまた社会関係性という文化事象、社会的、社会関係的な事情の影響下にある事が示されている。

そして飢饉のような状況下では、相対的貧困線と絶対的貧困線の逆転と言うべき事態が起こり、その社会内では平均的なレベル以上の所得であっても、絶対的貧困線以下の生活となり広汎に餓死が蔓延する。この事実を踏まえて、センは不平等問題としての相対的剥奪（貧困)」が絶対的貧困にとって代わる事はできないとして、「相対的剥奪は絶対的貧困を補完するものである[46]」という 1970 年代の先進国側の議論、「『豊かな社会』の成立によって貧困は消滅した[47]」「もはや絶対的貧困は終わり相対的貧困の時代である」と言う言説に対している。

アマルティア・センのエンタイトルメント概念は「購買力ないし実質所得と言った経済学の概念を包含すると同時に、政治的、社会的権利などに基づいた食料入手能力をも含んでいる[48]」と指摘されており、この所得情報（厚生）によらない貧困アプローチは国連の人間開発計画指数（HDI)、人間貧困指数（HPI）の創出（1990 年）に大きな影響を与えている。

---

46 アマルティア・セン 黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢餓』P289 岩波書店　2004 年 5 月

47 富士村正之　『貧困不平等と社会福祉』P21　有斐閣　1997 年 4 月 20 日

48 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』P 286　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

（2）ケイパビリティ概念

1）反厚生主義的な概念としての「ケイパビリティ」

センが飢饉の分析に用いた「エンタイトルメント（権限）」概念は、「厚生」による貧困アプローチ、厚生関数、貧困指標（測度）によっては、貧困者内部の格差、階層構造の影響の捕捉える事が困難であり、それは貧困測度の中に組み込まれた不平等指数を公理分析的に微調整をはかりつつも、困難であると言うところから、厚生アプローチに変わるエンタイトルメントによる危機へのアプローチの為に考え出されている。そしてそれから 2 年を経た 1983 年に、センは「ケイパビリティ（潜在能力）」概念を提示する。

センのケイパビリティ概念は、「厚生」主義へのアンチテーゼ、「厚生」に変わる概念として、社会政策、貧困政策のベースに置く貧困測定のための概念として提示されている。

前述のように、厚生、効用の定義は「ひとびとがある経済メカニズムの帰結から受ける主観的満足(効用或いは厚生[49])」であり、それは主観的な満足感であり、万人に共通な基準とはいえず、社会全体の幸せ、厚生を評価する事は出来ないのであり、旧厚生経済学は、序数的な効用に依拠する枠組み（新厚生経済学)、パレート原理を軸にして、社会状態を測る時代へと動いていた。

しかし 1951 年にパレート効率性は独裁者の存在を容認するというアローの不確定性定理、さらにそれを進めて、センは 1970 年に「パレート原理とセンの最小限の自由尊重主義の原理を同時に満信足する社会的評価形成ルールで、普遍的な適用可能性を持つものは論理的に存在しない。[50]」とする「パレート・リベラル・パラドックス」を示している。これは「経済界のみならず政治学、法哲学、倫理学にも影響を及ぼした。[51]」とされる。そしてセン自身 1983 年にエンタイトルメント（権限）による飢饉への原因分析の後で、「厚生」に変わる新しい人間の幸せの基準として「ケイパビリティ概念」を提示している。

2）ケイパビリティの定義

その定義は「人が自ら福祉を実現する自由度[52]」、また後藤は「諸財の有する特性を個々人の財（特性）利用能力・資源で返還する事によって達成される諸機能の選択可能集合[53]」と

---

49 鈴村興太郎　後藤玲子　アマルティア・セン　経済学と倫理学　P12
実教出版 2005 年 11 月 25 日

50 同上　P120

51 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』Ｐ65　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

52 塩野谷祐一/鈴村興太郎/後藤玲子編　『福祉の公共哲学』　P77　3 行　東京大学出版会 2005 年 5 月 30 日

53 後藤玲子　アマルティア・センの潜在能力アプローチと社会保障　Ｐ 1

し、更に「個人の『福祉的自由』(Well-being freedom) を表すと解される」としている。

ここで言う諸機能とは、人間の幸せな生活を構成する諸機能『「適切な栄養を得ているか」「健康状態にあるか」「避けられる病気にかかっていないか」「早死にしていないか」「幸福であるか」「自尊心をもっているか」「社会生活に参加しているか」[54]』などの生活の質に関連する内容である。

3) ケイパビリティ概念が提起した事

センが提示する人間の幸せの基準「ケイパビリティ (潜在能力)」においては、人間とは「幸せ」を構成する諸機能の達成を求めて、その為に行動する存在であり、この行動が「自由」である人間像が前提であり、この構成は、近代的自我作用への信頼をベースに置いて構成されている、近代的な自我の理性的な働きを前提にする構成とも考えられよう。

「厚生」という概念、新厚生経済学における　序数的この概念構成上の前提である個人における「意志の自由」が、どの程度まで援用できるのかについては、様々な言説があり得るであろうが、人間社会の階層構造、習俗、社会制度などの文化事象の影響の下で、さまざまに歴史時間と共に動いている社会文化的な構造からの制約条件の下で、ケイパビリティの構成要素であるファンクショニングズ (諸機能) を測定する事が想定されている。それらは人間生活の諸要素として互いに影響し合あい重なり合う諸機能であり、システム的に構成される人間生活の在りようとして理解される。

センの主張は、各人が実際にどの範囲の財を活用できるのかには違いがあり、さらに目の前の財を活用できる方途も、その人の境遇 (障害の有無、知識、技能、貧富、男女など) から様々な制約を受けており、同じ財 (所得) を活用しても各人が同じ豊かさを達成できるとは限らないとして、個人の生きる条件の多様性を前提に、地域社会での地位、政治的不安定さ (暴動など)、社会保障の水準、社会状態、文化、経済構造にも影響を受ける問題であり、たとえ同じ所得 (財) を活用できるとしても、実際の財活用行動は、境遇や社会のあり方により制約をうけるとして、ケイパビリティとは「諸財の有する特性を個々人の財 (特性) 利用能力・資源で返還する事によって達成される諸機能の選択可能集合[55]」とされ、その人に許される財利用のための選択肢、実際に何ができるのか、その人に可能な幸せを求めるための行動の違いを前提に、結果的に達成できる豊かさの違いを、各人のケイパビリティの違いとして構成している。

---

www.rengo-soken.or.jp/dio/No149/k_hokoku1.htm　0702/11

[54] アマルティア・セン『不平等の再検討』P59　岩波書店　2000 年 12 月

[55] 後藤玲子　アマルティア・センの潜在能力アプローチと社会保障　P 1
www.rengo-soken-.or.jp/dio/No149/k_hokoku1.htm　0702/11

4）　ケイパビリティ概念と貧困政策

ⅰ）比較する他者

ケイパビリティ・アプローチは、その最初に応用された重要なテーマが不平等問題であった[56]ことは特筆するに値するとされている。不平等問題とは、多様な生活問題を通して現れる社会階層や社会構造に規定される社会問題であるところから、生活の全分野に及ぶ情報に依拠しつつ、社会文化的な構造と重ね合わせて、さまざまな生活機能が相互作用を通して進行する不平等問題を、多項目的な構成として進めるこのアプローチ、多軸的な調査によるアプローチとして進められたのであり、社会制度、社会の構造の及ぼす影響から、その平等を問題していると言う評価である。

多様な諸条件（男女格差、暴動の有無、産業構造等）の不平等を補償し、個々人に平等な財活動と、その効果をもたらすための社会政策として、不平等問題解消のための政策の検討のための構成として、ケイパビリティ概念が構成されているとしている。

そしてそのために、飢餓の蔓延する飢饉などの社会状態おいても、絶対的貧困線と相対的貧困線(不平等問題における均等分割線)の逆転現象を回避できるという、絶対的基準としての概念構成とされており、そうであれば、比較する他者を想定し得ない構成であり、実務的な貧困調査の場面で、生活財（食料等生活物資）消費に係わる困難の度合いは、各個人においてどのように計測され得るのであろうかか？（絶対基準）

ⅱ）実務上の問題

ケイパビリティ概念においては、資源配分問題と個人間の潜在能力の分配問題とが論理的にどうかかわるのかと言う点が問われずじまいであるという指摘がなされており、また「可能性の集合を評価する際の問題など、その枠組み実用性に疑問が指摘されている[57]」との指摘がなされている。（実用性）

この指摘はケイパビリティの政策への応用である国連の人間貧困指数においても、旧来の貧困へのアプローチと大きな違いは認められないとの指摘もあり、ケイパビリティ概念を構成する諸機能の選定には、相対的貧困指標や社会的排除指標の項目選定の困難性との同様な問題が持ち越されていると考えられる。（指標の特定困難））

「ケイパビリティの比較のみに基づいて貧困指標を作成する事が困難[58]」「貧困層内部の

---

[56] 絵所秀紀　山崎幸治編著　アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―　Ｐ98 晃洋書房　2005 年 2 月 25 日
[57] 同上　Ｐ92
[58] 同上　Ｐ93

不平等を考慮した貧困指標を作成するためには、ケイパビリティの剥奪の程度をウェイトづけして集計する必要があるが、そのような剥奪の度合いを、常にどのファンクショニングに関しても計測できるとは限らない。」とも指摘される。(計測の困難)

ⅲ）貧困概念が内包する不平等問題

絶対的基準で計測する「財活用行動における自由度」に規定される概念としてのアプローチが、貧困へのケイパビリティ・アプローチとされるのだが、貧困概念が内包する不平等問題の広がりは、生活の全分野に及ぶ構成であろうから、不平等概念における、比較する他者を捨象した上で構成された「ケイパビリティ概念」と言う規定性、絶対基準として構成されたケイパビリティ概念の構成要素「ファンクションズ・機能」でありながら、「ファンクションズ・機能」の相互関連性の問題も想定され得る考えられる。このところで概念構成上の絶対的な基準と言う想定は、データを読み込むにあたり、困難を抱える可能性があろう。

幸せな生活自体が抽象概念であり、現実の人間の生活実態との接点である「現実課程」、人々の生活困窮という現実課程とを繋ぐ、いわば足場のようなもの、不平等問題で言えば、比較する他者、均等分割線のような実証可能な現実課程を捉えると言う構成を廃した、絶対的な量とされるケイパビリティの評価にあたり、各機能の定義としては社会文化性を前面に出した構成であり、動きつつあり多様性ある社会文化の中で動く事象、相対性の大きな問題設定にならざるを得ず、実態把握に幅が生じる可能性も大きいのではないだろうか。

5）ケイパビリティ概念の観念性・時間性・絶対性について

ケイパビリティ（潜在能力）概念について、次の 3 点について纏める。

時間性；このように時間軸を未来に向けて、潜在能力と言う表現で指標の項目を設定する概念枠であるところから、ケイパビリティ測定のための指標の特定、そしてその集計において、不確定要素を抱えざるを得ないのではなのかと思われ、ケイパビリティによる貧困の測定には、実証性を求める社会調査として構成するについて、指標設定、指標の特定とその集計には困難性が横たわっていると思われる。

観念性：『「適切な栄養を得ているか」「健康状態にあるか」「避けられる病気にかかっていないか」「早死にしていないか」「幸福であるか」「自尊心をもっているか」「社会生活に参加しているか」[59]』などの生活の質が問題になる概念構成であるところから、これらケイパビリティの構成要素は、それぞれをどのような調査事項として、どう数量化できるのかと言う問題が生じると思われる。セン測度が明らかにしているように、貧困は不平等問題を抱えた概念であるところから、センの厚生主義批判の幹と言うべき視点、社会の階層構造からの個

---

[59] アマルティア・セン『不平等の再検討』P59　岩波書店　2000 年 12 月

人の行動、自由度への影響、磐田心理社会的側面の捕捉において、ファンクショニング（機能）概念をもって、階層構造をそう捕捉するのかが問われるのではないだろうか。

現実の社会内の差異の構造、差別、不平等の違いの構造の中で、自己の位置の及ぼす心理社会的要因の限定ができないと思われ、絶対的なスケールという設定は、貧困の中の心理社会的側面をはかるにあたり、その個人の社会内の位置関係の影響を比較衡量するにあたり、困難性をかかえのではないだろうか。

絶対性：相対的貧困と絶対的貧困の逆転の無い絶対的水準としてのケイパビリティと言う表現であり、そうした規定性のケイパビリティ概念であるところから、貧困と一体的な不平等の状態が、各地域の文化多様性において、また社会構造の多次元性において、絶対的な量として評価するための調査項目を特定し難いと思われ、必要不可欠な生活財（水・食料等）をめぐって、その利用権能への階層的な影響の評価の困難性が危惧される。ケイパビリティ各機能の特定については、理論的には構成できても、実際の指標の特定、その集計においての困難性は社会の階層構造に規定されている個人の財活動行動である所から、その重層性の中の個人の潜在能力、経済活動・行動の自由度としては、社会システムの中で動きあう量であり、相対性を抱える量とならざるを得ないのではないだろうか。

6）財の配分問題とケイパビリティ概念

ケイパビリティ・アプローチについて、実際の適用の中では「センによる潜在能力の定式化は基本的に個人の潜在能力の記述に留まっていて、資源配分問題と個人間の潜在能力の分配問題とが論理的にどうかかわるのかと言う点が問われずじまいである[60]。」と指摘されている。

※ センのケイパビリティ概念は、自然と文化が重なり合う形の構成となっており、人間の生活の社会文化性が生活の全分野を覆いつくしている事の表現とも言えよう。しかしそれぞれ生活機能は何処までが最低必要量なのか、言い換えれば不平等測度における均等分割線、貧困測度における貧困線を問題とせずに、絶対的な量として想定されている。しかし自然的生物的な生存の為の必須条件、そしてその量については、生命危機をもたらす程度、その基準としては、財の配分問題に規定される問題と考えられ、その意味で生命維持に必要な線が存在せざるを得ないと思われる。そこで貧困線に変わる生物学的最低線、生命維持の為の量は設定されざるを得ないと思われ、センのケイパビリティの構成は命の問題が捨象され得るのではないだろうか？

※ ケイパビリティの定義は、行動の自由と言う抽象的な概念であり、この概念を枠づける実証性あるファクターとしては、現実の社会のどの財を、どのような社会政策的な

---

[60]吉原直毅　「分配的正義の経済哲学：厚生主義から非厚生主義へ」　P35　2006 年 1 月
http://www.ier.hit-u.ac.jp/Common/publication/DP/DP472.pdf　07/07/07

布陣においてどう動かすのか、達成され得る幸せの量はどの水準なのか、といった議論がひき続く事が想定される。そのステップとして、社会状態の調査、個人の状態が検討される必要があると思われる。社会の在りよう（階層構造・習俗・政策動向等)、そして生活財（衣食住）の配分の両面から規定される財の配分問題であり、社会構造の重層性、そのシステム的に動くところの、個人の経済活動上の自由度として想定されるのであろう。その構造化をもって概念の構成が求められざるを得ないであろう。

※ 貧困政策は社会文化性を踏まえつつも、自然生物性、生命保持を確保せざる得ない分野として、食料調達関係の重要性がベースに置かれねばならないのではないだろうか。ファンクショニングの中の重みづけと言った観点が必要になると思われる。絶対的な値とされるケイパビリティの規定、構成で、この問題（各機能の定義の明確化とその地域やその時代の中での重要度）が解決されうるのだろうか？

※ 政策策定への応用など実務的な場面においては、各社会、国家における基本的ケイパビリティの特定が困難でありその測定、評価も困難とされている。さらにケイパビリティの政策への応用である国連の人間貧困指数については、これまでの貧困へのアプローチと大きな違いは認められないとも指摘されている。

基本的ケイパビリティ、諸生活機能（ファンクショニングズ）を実証的に把握しようとすれば、適切な栄養とはどのラインが適切なのか、早死にか否かの基準はどこか、幸福とは何か、自尊心を持つとはどんな状態かなどと、評価に幅のある内容となっていて、自然生物的であって、社会文化的な生活を営む人間において、ケイパビリティの構成要素足る基本的機能(ファンクションズ)における社会内での代表値、標準値と言った、不平等測度における均等分分割線、貧困概念における貧困線を想定する事は不可能な構成とも考えられる。そして時代性や地域性など、各集団の文化内容により、幅のある内容となっており、この点が国連の人間開発指）等の応用における指摘、批判点に重なって来るのではないだろうか？

ケイパビリティは、その社会における生活の基本的機能部分である「基本的ケイパビリティ」をもって概要を測る事が出来ると定義されているが、その基本的な要素は、その社会の文化、経済水準によって異なっており、互いに多重層的でもあろうと考えられる。各機能のその社会での生活にとっての重要さは「重要な物の中でも、相互にウェイト付けをしなければならない。[61]」と言った側面があり、議論の分かれるところとなっている。

7）世銀の報告書について

61 アマルティア・セン『不平等の再検討』P65　岩波書店　2000 年 12 月

世銀の報告書「貧しい人々の声」(World Bank2000a:黒崎他）では貧困の特徴として、「第一に多面的な現象である事、第二に飢えに代表される物質的な剥奪が深刻な事、第三に心理的側面における『無力感』(powerlessness）が広汎に見られる事、第四に道路・運輸・上水道など基礎的な社会基盤整備がなされていない事（社会インフラの不足)、第 5 に病気への脆弱性や教育水準の低さなど人的資本不足、そして第六に様々なリスクにさらされ易く、いったん不運に見舞われると極めて脆弱な状況に陥ってしまうと言う『リスクへの脆弱性』（vulnerability to risk)」が指摘されている。

これらの多面的な剥奪状況は、センの言うところの「基本的なケイパビリティの剥奪」にほぼ重なる事は言うまでもない[62]。」とされる。貧困は多面的な現象であるとして、社会的な基盤整備の不足、基礎的な生活資源の不足、病気への脆弱性、教育水準の低さ、さらには「リスクへの脆弱性」が指摘される中で、「物質的な剥奪」がその最初に押さえられている。

また「十分に栄養を採る事、回避できる病気にかからない事、」などの基本的なケイパビリティにカバーされる内容は、財（食料)・サービス（医療・教育）の一定の配分が必要であり、脱貧困の為には必須である事も示されており、ケイパビリティの平等とは、財・サービスの公正配分を大きな問題として含んだ、自然生物的生存条件から、社会文化的な生存条件、要因をも俯瞰した内容、構成となっている。

そしてこのようなケイパビリティ概念は、多重層的な情報に依拠する概念であるために、この概念の外延、輪郭に、ある種の幅と厚みを持たざるを得ない、相対性を抱えている事も伺えるであろう。

センは、人間の幸せの量を考えるにあたっては、前述のように、個々人の境遇（出自、病弱、障害の有無、貧富など）を重要な問題としており、ケイパビリティ概念は、個々人の生きる境遇を測り比べる事が出来る概念、として構成されている。

この観点は序数的効用によって構成されたバーグソン・サミュエルソンの社会的厚生関数の限界、個人間での比較不可能な序数的効用を前提する枠組みへの対論として理解せねばならないであろう。そこで各条件下で人生を生きる個々人の間での「比較可能な幸せの量」が追求されており、各個人それぞれの境遇からの制約を測り比べる事ができる量として、社会政策的な配慮をしようとする志向性を持つ概念となしている。この体系において、未来に達成可能な「幸せ」の量、「実質的な自由[63]」として構成されたケイパビリティ概念である。

---

[62]絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』P 91　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

[63] 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―　』P4 晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

※）国連の「人間開発指標」とケイパビリティ概念

だが一方ではこの構成ゆえに、「ケイパビリティ概念」「機能ファンクショニングズ」概念においては、現実の社会の平均所得等の低さ、生活水準の標準が低下、飢饉や暴動状態が現出する社会においても、それに影響を受けずに測定される事ができるという、相対的貧困線が抱えた絶対的貧困線との逆転状況と言う問題は生じ得ない構成となっているとして指摘される。

このような隘路と特徴を抱えているのが、センの貧困への「ケイパビリティ・アプローチ」であろうが、その応用である国連の「人間開発指標」の改訂において、さまざまなデータの処理手法、技術によってこの隘路について改善の工夫がなされていると思われる。各調査事項の標準値、上限、下限などの設定がこれに当たるのであろう。

そして国連の「人間開発指標」改訂の議論の中では、一方の貧困は人間生活を構成する多側面の中で、主要とされる 3 分野（平均寿命、識字率、GDP）から捉えようとする。

国連の開発とは、産業の開発を焦点として進める貧困撲滅である。そこで各地域に暮らす人々の貧困の実態を他地域と比較衡量して、各開発プロジェクトの効果測定、比較を行う得る指標といった目的に沿って考案されているのだが、「人間開発指標」はこの目的と間で整合性の採れた指標であると言う事ができよう。

8）不平等問題の対象領域の広がりと文化事象

各社会の貧困線を定めた上で、貧困概念を枠づけると言う、貧困概念の構成が物語っている事は、貧困概念もまた相対的であって、貧困線所得者と言う対照集団との比較によって浮かび上がる関係的概念であると言う事であろう。

貧困概念は概念としては自然生物的な生存条件の枯渇を来した結果であり原因であるところの低所得所得不平等問題として形成されたが、概念自体がいわば時代とともに変化しており、次第に不平等問題を抱え持つ（セン測度が示している）概念として展開し、21 世紀の今日では、ホームレス問題、そして飢饉や飢餓、天災地変戦争などの中の困窮、社会文化的な生存条件の枯渇が、自然生物的な死をもたらすと言う時代を迎えている。

この事態は、貧困と不平等は所得不平等を含みつつ、自然生物的で社会文化的な生存条件が、互いの枯渇状態において繰り返され、重なり合っている状況として、政治をふくめた歴史の動きと共にあると予測される。どのような社会文化的な生存条件が人間の生物的な生存条件を失わせるのか、社会文化的な条件をどのように時間軸を廻しつつ手当できるのか、その困窮を引き起こすものの予測について、貧困不平等研究、その調査はどう活用できるのか、そういう難しい時代の到来とも言えるのではないだろうか？

古典的な貧困概念は所得不平等と同値であり、1970 年代の相対的貧困は生活様式の不平等問題であり低所得問題であり、21 世紀の欧州の社会的排除と言う貧困は、社会文化的な生存条件を引き起こす自然生物的生物学的な生存条件の枯渇の双方を含みつつ、それぞれの均等分割線と言う比較する他所を措定しつつ概念規定されており、実証的であるべき貧困概念の概念規定をなぞっている言うべきであろう。

生命維持が困難なラインである絶対的貧困線の場合にも、それ以下の所得状態の人口、絶対的貧困線以下で生活する人々が生命維持を果たして、社会内で相当数、人口数パーセントを有しているとして進められているのが、貧困調査であろう。

そしてしかしと言うべきであろうか、現実の生物としての人間に訪れる死は、さまざまの様相である。戦後混乱期の日本の配給制度だけの食料量をもって餓死した裁判官も存在し、この方の死は生物学的な死でありながら、最も文化的な彼の信念が齎した死であり、最後までその死は文化的な死であったと言わざるを得ないのであろうか。また高度先進医療の医療装置に囲まれて、最後まで明晰なる意識を保ちつつ迎える死も、生物学的な死でありつつ文化的な死といえるのであろうか。

一方では例えば現代社会の繁華街の路上で死を迎えるホームレス状態の人の場合、最後の時に多くのシラミがやってきて痒いと訴える事もある。その場合は人間の身体もまた動物の死骸として、他の生物種の餌食、食料として、生態系の中の食物連鎖の一環として、血中の二酸化炭素濃度の高い状態で徘徊していれば、近在のシラミが集まってくるのであろうか。そうであっても、その死は全くもって野生動物同様の動物生態学的な食物連鎖の一地位にありながらも、一方では彼の意識は故郷の情景を彷徨うのやもしれず、社会的排除とされる不平等問題において、稼得不能、住宅の喪失、低所得、社会的排除、という社会関係性に規定された、人間社会の中での死でもあろう。

そこで人間に死をもたらす、絶対的貧困の定義上の生命維持ができない程の低所得状態、そして他方の相対的貧困（不平等）という物質的剥奪、不平等問題の双方を抱えている貧困概念において、絶対的貧困、相対的貧困という二つの貧困概念は、絶対的貧困が核であって、それを補完する相対的貧困と言う図式もまた、社会の所得分布状態により変化せざるを得ないであろう。貧困概念の中の不平等問題は消し得ない要因として、貧困の全事象を覆っており、食糧の配分状態とともに、文化的要因、社会の階層構造によって変化するといわねばならないのであろう。。

（9）絶対的貧困が貧困の核であって、相対的貧困はその保完物なのか

センの議論は、貧困概念を不平等概念とは区分けした別概念としており、ケイパビリティ

概念は、ケイパビリティの構成要素「ファンクションズ・機能」の集合であり、「人が自ら福祉を実現する自由度[64]」とし、その不足から貧困を捉えようとする。センは、自由の内在的価値、自由自体の価値を認めるが故に、現在の諸機能の達成度を超えて、自由自体としての「ケイパビリティ（潜在能力）」とするという見解[65]が示されている、それは計測不可能性を容認するとも思われる。

そこでこの概念構成は、ケイパビリティの定義である幸せな生活自体が、抽象概念であり、さらに未来の達成量の可能性が問題にされるところから、現実の人間社会、人間生活実態とケイパビリティ概念の間を繋ぐ、「眼前の事実」や「現実課程」、いわば足場のようなものを失っており、抽象性が増大しているという結果を生じていると思われる。

ケイパビリティ概念の観念性は、貧困概念から不平等問題を捨象した結果でもあり、貧困問題は程度の差は有りながら、その全てを覆いつくす不平等問題、相対的貧困であろう。しかしセンは不平等問題に補完的な位置を指定しているように、貧困と不平等問題を別個の概念として規定する事の矛盾状況として、その結果ともいうべき内容が、さまざまな批判的な論点と重なるのではないだろうか。

不平等問題の過酷な部分は、貧困概念の内側である。しかしながら飢饉、飢餓が蔓延する社会においては、全員が餓え、餓死も現出する可能性は大きく、より貧者において被害は大きいであろう。絶対的貧困線と相対的貧困線の逆転と言う事態も現実課程としてありえて、それが最も過酷な貧困状態であろうと思われる。
センにおいては、飢饉のような場合であっても、不平等の構造に従って、順次生物としての人間の生命危機が及び、死に至るという事実関係をエンタイトルメント概念による飢饉分析によって明らかにしている訳である。

絶対的貧困以下の人口数を想定する絶対的貧困概念自体に論理矛盾が包含されているとも言えようが、貧困概念の核であるとされる絶対的貧困と不平等問題との重なり合いは、セン測度における双方の概念の複合状態は「セン測度に包含されるジニ係数の均等分割線は貧困線そのものである」事によって示されていると思われる。そしてこの事が、「準順序」という貧困測定上の数理調整、その過程を要請する所以と考えられる。

これら不平等問題の対象領域の広がりは、生活問題の全分野に及んでおり、不平等概念の構成は、貧困と不平等の重なり合いの全体性、そして不平等の中の生活困窮に係る項目にお

---

64 塩野谷祐一/鈴村興太郎/後藤玲子編 『福祉の公共哲学』 P77　13 行 東京大学出版会 2005 年 5 月 30 日
65 同上

いて、その過酷な部分を貧困概念がカバーしていると想定できるであろう。貧困と不平等は分かちがたく重なっている概念同士であり、生活の全分野におよびうる不平等問題であり、そのうちの過酷な生活問題として顕れる状態が貧困問題といえよう。近代主義的な概念構成、一つ一つの概念は孤高を保って概念規定されているところから、互いの近接領域のさまざまな概念との関係によって、浮かび上がる諸概念のあわいについて、恣意的になる可能性を抱えるのではないだろうか。